

二〇一八年二月二七日(参加者一〇名)

子午線を西へ東へ春うらら さつき
 水琴窟春のリズムを奏でをり さつき
 淡路へと消ゆる架橋や春霞 さつき
 沖遙か浮灯台の灯の朧 さつき
 梅枝垂る古りし鳥居の両袖に せいじ
 いかなごの船団綺羅の波隠れ せいじ
 子午線にたつ十字架や風光る せいじ
 身に入むや震禍の瑕の残る磴 せいじ
 漱ぎたる名水の温々し 節子
 踏青や子午線の塔一周す 節子
 水琴窟奏づはいまし早春譜 節子
 子午線を跨ぎて眺む沖おぼろ 節子
 こぼれたるいかなご踏まれ春愁ふ わかば
 檻褸布を引き上ぐるごと若布刈る わかば
 水仙郷なせる宮居のなぞへかな わかば
 沖を行く巨船の水脈に風光る わかば

指呼されしいかなご漁へ遠眼鏡 うつぎ
 潮垂らす檻褸布のごと若布干す うつぎ
 国生みの島を隠して沖おぼろ うつぎ
 ジャンケンで決着したる糶うらら たか子
 黙々と墓彫る石工背ナの春 たか子
 子午線の伸びたるさきは春の海 たか子
 春がすみ淡路の島の浮かびけり よう子
 子午線の朧の海へ消えにけり よう子
 潮騒に瞑想すれば春眠し 治代
 囀や昼なほくらき深山道 ぼんこ
 寺の庭春光の海借景に みどり

二〇一八年二月二七日(参加者一〇名)

吟行句会みのる選